

クンケル文庫について

西村, 重雄
福岡工業大学教授, 九州大学名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/11011>

出版情報 : 貴重文物講習会. 10, 2008-07-25. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

『クンケル文庫目録』について

西村重雄

1. 本学文学部史学科森洋教授は嘗って本誌6—10(1970年)に、卓越した学者の蔵書の保全が図書館の重要な任務であることを力説され、また実際に、フランス古文書学の碩学Charles PERRAT教授の遺文庫の本学への購入を実現され(「ペラ文庫について」本誌14—4〔1978年〕)、さらに、数年にわたる御尽力により、これを『シャルル・ペラ文庫目録』として冊子体カタログを完成させ、内外の図書館等に送付され、これが国際的にも高い評価を受けていることは、よく知られているところである。

この良き先例のある本学附属図書館において、先年購入されたローマ法の碩学W. クンケルWolfgang KUNKEL教授(1902—1981)の遺文庫(教授の業績、蔵書の大要につき拙稿「クンケル文庫について」本誌19—4〔1983年〕)の整理が完了し、昨春、『ヴォルフガング・クンケル文庫目録』として冊子体カタログを刊行し、内外の図書館・関係者に送付した。目録原稿の一通りのものさえ未だ出来上らぬ時点の1987年9月に私自身はあわただしくミュンヘンの在外研究に出發し、6ヶ月後に660頁を超える大部の目録を異国で手にしたときの感激は言い表わせないものがあつたところである。文科系学部に通務する者の最も重要な任務の一つが在任中の図書館の充実であると先学から教えられている者にとっては、いわばその任の半ば以上を果したかのような気になったと言っても過言ではない。

以下、この遺文庫整理にまつわるいくつかのことを思いつくままに綴り、これまでクンケル文庫につきお世話になった方々への、私なりのささやかな謝意を表したいと考える。

2. クンケル文庫の性格は本学に納まるまでの経緯を記すことによって明らかとなろう。

教授が、1981年5月初めに逝去された際(同夫人は教授にわずかに先立ち没)、ブルッセルで生物学を研究される御令息Dr. Peter Kunkelおよび、ミュンヘン心臓外科病院で小児心臓外科

医として活躍される御令嬢Dr. Regula Kunkelを遺されたが、いずれも御尊父のお仕事には直接関係がなく、蔵書は手放される方向でその弟子でありミュンヘン大学法学部における講座後継者であるディーター・ネル(Dieter NÖRR)教授に相談された。同教授は、碩学の蔵書および書簡が学問史の上からも重要であると考えられ、それらをすべて一旦、バイエルン学士院の一室に移し、(クンケル教授は同学士院の人文・社会科学部門部会長を長らく勤められ、ネル教授もまた同部門の部会長〔現在は副院長〕という事情による)、同じくその遺弟であるヴィットマン(Roland Wittmann)教授に蔵書リストの作成を依頼され、同教授は3ヶ月をかけて、これを完成された。そのリストを基礎にネル教授がドイツ内外の大学と接触されたが遺族側の「一括して受け入れられ、かつ名誉をもって取扱われること」という意向もふまえ、最終的に本学に納ったものである。

遺文庫が、学者の生前使っていた形そのまま大学等に購入されるという例は一般には極めて稀れであるといわれる。古書店を通して売却の話があるという通常のケースでは、いわゆる目ぼしい書籍はまず抜けてしまうことになるのが一般で、転送・転売の過程でこれが何回も繰返されることが多いと聞く。現に「碩学の文庫だというのでそれを信じて購入したが実はたいしたことがなかった」という話は耳にするが、上のような事情からすればおそらく不可避と思われる。学者がなくなったその時点の状況で購入するため、日本の学者が戦前ドイツで遺文庫を買うに際し、碩学の没後直ちに未亡人から有無をいわさずその蔵書のある部屋の鍵を取り上げた、という、昔なにかで読んだ苦勞話を思い起すようなことは、今回は全くなかったのは幸いであった。

3. 本文庫の図書館の数だけを問題とすればこれほどの碩学にしては単行本約3千冊は少ない

のではないかと、との疑問を持たれる向きがあるかも知れない。教授は戦争中はボン近郊にお住いで、戦災に邁っておられず、昔からのものがよく保存されていることを考えるとこれは尤もな疑問のようにも思われる。そして、同じく日本に将来された（教授自身から私の伺った表現では）「自分の先生の先生に当る」ゼッケル Emil Seckel の文庫（東北大附属図書館所蔵）と比べ、あるいはゼッケルと同時代の O. ギールケ文庫（一橋大図書館所蔵）などとも比べるとその印象は一見正しいように思われる。しかし、ドイツにおいて、学者が次第に大学の研究所の書物を利用して研究するようになり、また、戦争中・戦後の容易でない経済状況といった背景を考えるとこの量の問題は十分理解されるのみならず、次の世代すなわち現在のドイツのローマ法学者はいずれもこれにとっても及びぬことを異口同音に述べられるのも興味深いところである。その意味では、遺文庫購入による図書の系統的充実の最後の機会をとらえたということになるのか。

さて、ヴェットマン教授作成の蔵書リストに、抜刷について「約 5000 点見当」とのみあったが、搬入時に、正確に数えると（重複や短い書評の類も含めてであるが）8000点にのぼることが分った。抜刷である以上、いずれも既に何らの形で公刊されたものであるのは当然である。しかし、従来、わずかな頁数の論文を探すのに苦労したことある者にとっては、入手困難な雑誌や記念論文集に載せられたものが抜刷の形であることは大変有難いことである。その質も量も極めて良いものであるので、本文庫の大きな特色となっているといっても良いであろう。

しかし、このことは、整理についても、又、冊子体カタログの発行についても、常に難問とつき合う羽目となった。たとえば、英独仏伊西語で書かれたものはまだしも、現代ギリシャ語・ロシア語、さらに北欧・東欧の言葉で書かれたものもかなり入っていたので、そもそも何語で書かれてあるのかと首をひねることもあった

次第である。その中に、日本の学者の欧文論文のいくつかがまじっていたのは同国人として嬉しいことであった。抜刷の類は、重要なものほど散逸の可能性が高いといわれるので保存のため、学者ごとにこれを製本し、末尾に仮カードのコピーを付して索引の代りとしたが、全体で 500冊にも及ぶこととなった。

4. 図書館における図書管理の一般的な要請からすれば、遺文庫ともいってもこれを分解し一般図書に混配する考えもあり、現にローマ法・労働法の貴重な遺文庫であるロートマル Philip Lotmar (1850—1922) 文庫は法学部図書室において混配されてしまっている。しかし、ペラ文庫は森教授の意向をうけ、一体として配架され、クンケル文庫もその例に倣い、同様に扱われることになり、碩学の蔵書の保存としては理想に近いものとなっていることは、まことに有難いところである。因みに、ペラ教授の主要業績である *Tabelltes Albertini* がペラ文庫に欠けることを森教授は遺憾とされた（前掲本誌14—4）が、クンケル文庫に見出され、補完することとなった。クンケル教授は古文書学に並々ならぬ関心を持っておられたことでもあり、両碩学の蔵書がそれぞれ良きパートナーを見出したことを喜ぶたい。

単行本の分類については、教授が案出されたと仄聞するミュンヘン大学法学部レオポルド・ウェンガー法制史学科のものを基礎とし、考案したものである。法源から補助科学、そして叢書・抜刷と約40項目に分け01から90までの2桁の数字で表示することとした。この分類項目についても、また、具体的な分類作業においても、個人蔵書の性格を生かし、単なる配架の便宜と割切って作業を行った。したがって、図書館学上の厳密な分類からすれば誤りないし不当と指摘されることもあるかと思われるが、已むをえないこととお許し頂きたい。

5. 問題は、単行本および抜刷のカード作成および、それらすべてを含む冊子体カタログの発行をどのようにして実現するかであった。とりわけ、抜刷は数頁のものであれカード作成に

は単行本のカード作成とあまり異ならない手間を要し、また、カタログとして印刷すれば、全く同じだけのスペースを必要とする。さらにペラ文庫において約3000点のカードを冊子体として印刷するのに要した費用を伺い、他方、クンケル文庫の抜刷の量を考えると、その整理に要する時間からも費用の点からも冊子体カタログの刊行は殆んどその見込がないところであった。しかし、その頃、東京などからわざわざクンケル文庫のために足を運ばれる方が次第にふえ、とりわけ抜刷を含んだ目録の刊行は不可欠のように思われた。

当時の花田洋子目録掛長が、「これだけの量があるのですから、細かなところには目をつぶられるのが整理がスムーズにすすむ秘訣でしょう」と、にこやかにあっさりと言われこともあって、単行本・定期刊行物の本体に当る部分は、本館目録掛で整理して頂き、抜刷については小生の研究室に運んでアルバイトの方をお願いして本館の指導を仰ぎつつ整本・カード作成を進めることとなった。

作業中に思わぬ問題に出会うこともあった。例えば、抜刷中の書評のカード作成に思わぬ時間がかかり、しかも、要求水準をみたすのは難しい、ということが分り、書評については簡易カードを作成し、目次代用とはするも冊子体カタログに掲記しないことにしたのはその一つである。しかし、他方では、本体についてはヴィットマン教授作成のリスト、抜刷についてはかなりの部分につきクンケル夫人の作られたカードがあったため、大いに助ったことも事実である。全体としては、本体は本館目録掛において長年の蓄積とペラ文庫の経験を生かし、多忙な業務の中をLCカードに準拠した極めて正確なカードが作成され、他方抜刷については、さまざまな事情から毎年新たな方をアルバイトにお願いするという綱渡りであったが、それぞれに適任の方を得てとりわけ最終年(1986年度)に語学にも堪能な文学部西洋史学科を卒業されたばかりの方の助力を得るといふ幸運に恵まれた。

6. カードが完成してから、半ばあきらめかけていた冊子体カタログの可能性をさまざまに検討したところ、抜刷を含めた形でのカタログが、相当大部になるが、1冊として発行可能ということになった。具体的には著者カードのみを採録し、若干の参照カードを入れて索引に代用させ、一万点を越えるカードを縮少し、写真版として刊行することになり、ペラ文庫と同じく門司印刷株式会社のお世話になって、無事刊行までこぎつけた次第である。

7. 刊行に際し、平嶋義宏館長に加え、ネル教授から序文を頂くことが出来た。ネル教授はその序文を次のような文章で結んでおられる。

「日本に所蔵されるクンケル文庫——このことはひとつのシンボルとしてさまざまな解釈があり得ます。しかし、ここでは、クンケル教授の影響が広く及んでおり、その研究分野が強い生命力を備えていること、そしてさらに法史学において国々を越えて共同作業がなされていることのひとつのあらわれと解釈することが許されましょう。」

遺文庫の海外流出を惜しむ声との板ばさみの微妙なニュアンスが、拙訳ではうまく伝わっていないのではないかとおそれるところである。しかし、立派に出来上った目録を手渡し、お礼を申し上げたところ、「今日のドイツでは最早できなくなりつつあるこのような丁寧な作業をして頂いたことに、私の方こそお礼を申し上げたい」とのお言葉を頂き、また、バイエルン学士院にも一部寄贈頂けないかとお話して、喜んでお受けしたことであった。

また、内外の図書館・関係者にお送り申し上げ、その作業の正確さにお誉めの言葉を頂いている。実際、このように比較的順調に整理が立派に完了したのは、附属図書館に長い伝統に加えペラ文庫の整理によりその蓄積があったからであり、私達はこれを誇りに思うと同時に、今後とも維持発展させて頂くようお願いするものである。

8. 今になって振り返ると、いろいろ反省すべ

き点もあり、そのいくつかについて記すことをお許し頂きたい。

その1つは、学生時代から図書館に良く出入していた積りであったが、これを運営されている方々の細かな苦勞が分らず、随分、職員の方に御迷惑をかけたのはまことに申し訳ないことであった。一冊の本が納入されて、現実に利用されうるようになるまで、どんなに手間と時間にかかるかというものが今になってどうやらおぼろげながら分ってきたというところである。ある方の言によれば、「それを知っていたら、遺文庫の購入なぞというのは言い出せるものでない」そうである。今になればまことにその通りと思われることである。それを知らなかったのが良かったのか悪かったのかと自問する昨今である。

かかる碩学の遺文庫は、それ自体で一つの学問史の重要な資料となることは明らかであり、そのことを常に念頭におき、単なる書込用紙も保存するように配慮願ひ、それを叶えてもらった。また、現に法学部所蔵の先述のロートマル文庫につき、ハノーバー大学法学部法制史担当のリュッケルト(Joachim Rückert)教授からその書込調査の希望が表明されている。しかし、時間の関係上、書込の有無等まで調査しカードに記載することは殆んど不可能と思われ、それは断念し献呈辞についての記載にとどめてある。しかし、これとても必ずしも単純な作業でなかったことは事実である。

コンピューターを使わずマニュアル方式の点でもペラ文庫の方式を踏襲したことについておそらく、批判があり、たとえば、索引のようなものについても容易に付加しえたのでないかとの意見がありえよう。しかし、カード方式は百年を超えるいわば職人的芸として完成されており、その長所は、少なくとも当時のコンピューター・ソフトの現状から比較すると、容易にはすて難いものと思われた。しかし、コンピューターは、ハードについてもソフトについても日新月异であるから、今後は検討すべきものかもしれない。

なお、館長の序文の欧文は、このような国際

的な文献では慣例とされたラテン語で掲載することを当初は考えた。たとえば、昨年9月盛大に祝われたヨーロッパ最古のボローニャ大学創立九百年祭の招請状および返書はラテン語でなされている。小生には典雅な古典ラテン語を書くことは不可能であり、最終的にはこれを断念してドイツ語で掲載することになったのは残念といえば残念である。

9. クンケル文庫の購入から目録の送付まで大変多くの方々のお世話になった。

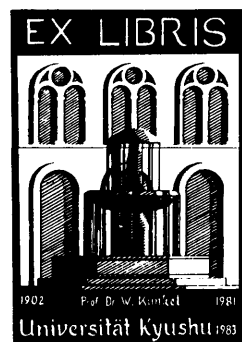
とりわけ、二代にわたる附属図書館長高野桂一教授・平嶋義宏教授および事務部長からはさまざまな御尽力と行届いた配慮を賜り、また三代にわたる法学部長徳本鎮教授・有地享教授・近藤昭三教授は蔭になり日当になり援助を賜った。

また、小生にネル教授の元での留学を勧めて頂いた広中俊雄東北大法学部教授は本文庫購入についても有益な助言を与えて下さり、購入・整理につき森洋文学部教授、松田高史九州共立大助教授がペラ文庫の経験に基き適切なアドバイスを頂き、さらに、整理などで生ずるさまざまな問題について、吉田道也法学部名誉教授に色々相談に乗って頂いた。

具体的な面倒な仕事については、図書館職員の並々ならぬ御尽力があっはじめて、事が運んだものである。また、抜刷整理につき、とりわけ福井由紀子さん・勝原絹代さん・渡辺由紀子さん(現琉球大附属図書館勤務)にはお世話になった。

ここに紙面を借り関係各位に厚く御礼申し上げる次第である。

なお、蔵書票は、ミュンヘンの新進画家 Christoph Haussner 氏の手により、ミュンヘン大学法学部およびその前の噴水を意匠としたものである。(法学部教授、西洋法制史)



蔵書票